

馬

徳永 直

私は馬が好きです。

それも、駄馬が、一ばん私には、親しみを感じます。

で、あの、ちゃんとりすまして、貴公子を乗せて、毛並なみのきれいな、恰好かっこうのいい馬は、私は、嫌いです。却かえつて私自身が侮辱けされてるような気がするからです。

馬の中には、随分、あばれ馬もいます。神経の尖った半狂乱な馬もいますが、それでも、私は、暴れ馬でも、私は好きです。

可哀のんきいそうな馬！

暢のんき気きそうな馬！

暴君のように威張こわった馬！

曠原こうげんに、放たれたままの馬などは、都会に見ることできない、人なつこいところがあるものです。

馬は、他の動物よりも並外れて、大きい眼を持っていません。馬の眼の青黒い瞳は、ずいぶん大きいです。

睫毛まつげが、その瞳に影をうつすくらいで、疲れ切って、ま

だ遠い道を歩かねばならない時などは、その睫毛が二、三度、こまかに動く、大きな涙粒が、ひとりでに、その瞳を潤うるしてしまふのです。

馬が泣くのを見ていると、共に泣かされてしまふものです。

私が十四で、弟が十一のときでした。

いつもなら父と二人で、ゆくのですが、父が病気で寝ているために、私と弟と二人で、馬を牽ひいて、仕事に出ていました。

ある日、私達は、夜の十時頃から、氷詰こおりづめにした魚を沢山積たくさんんで、七里りばかり距はなれている、植木うえきと云う町へ、行かねばならなかったのです。

私の馬は、八歳こまくらいで、栗毛の駒こまでした、私が手綱たづなを握とって、弟が提灯ちようちんを持って歩いていました。

しかし、町を出てしまつて、野道にかかつて来たころ

には、弟が疲れて来た様子でしたから、荷物を積んだ車の上に乗つけて、ときおり唄うたなんど唄うたつて歩きました。真暗まつくらな晩ばんでしたので、空には星なんか見えません。涯はてしない野原は、都会にすんでいる子供さん達には、到底一人歩きなんか出来ないくらい淋しいものですが、私達は、ちよいちよい父に連れられて歩いているので、割合に淋しいと思わないのです。

三里あまり歩いたと思うころから、何だか雨あめ催もよいになったのです。私は、車の上でいつか眠つてしまつたらしい、弟を呼び起こして、荷物に雨具をかけました。

私と弟とは、すっかり心配し始めました。その前の日も、雨が降っているのです、これに降られては、金釘かなくぎの難所が、うまくゆくかしらんと、気遣いはじめたのです。

一本松の茶店を過ぎたころ、雨がドツと降つてきました。た。

「困つたなあ」

私は心配で、馬を止めて、馬むまに筵むしろを被せて、風邪をひかないようにしながら真暗な空を見上げて、雲行きと、雨あしを図つて見たのです。

父に教わつたりしている経験で、西の空と、南の空か

ら、すばらしい勢いきおいで、薄雲のような比較的明るい空へ、真黒な雲が、ヒタおしに蔽おほ冠かぶさつて行くのを見て、これはひどい雨になると思つたのです。

弟の絆纏はんでんも、私の絆纏も、みるみる中に雫うちがポタポタ垂れました。雨合羽あまがっぱは父の一枚きりより外ほかにないのです。それで、私は提灯を消さないように、身体からだを前かがみにして大きな小田原提灯をかい抱かかっている弟に、その合羽を着せてやりました。

私は「困つたなあ」と思いながらそれでも元氣をつけて、馬の平首ひらくびをたたいて、坂道にかかると「ホラ、ホラッ」と掛声かけこゑしながら歩きました。

私は道が段々に、ぬかるみになってゆくのが一ばんしんばいでした。車や何かを挽ひいた人でなければ、その味が分からないでしょうが、この道路がわるいほど、私達にとつて、心配はありませんでした。

雨は、ますます土砂どじやぶりになつて来しました。

初夏の頃ですが、夜更よふけのことではあり、冷たさが身に沁しみます。

馬も疲れたらしく、しきりと、首や顔を、私の顔にくつつけて、足を鈍鈍らすのです。

でも、この雨が一時間や二時間でやみそうもなし、また少しでも雨の降った時間が永ければ永い程、金釘の難所がひどくなるだろうと思うと、無理矢理に、馬の手綱を、ヒュウヒュウとひきしぼりながら、馬をひっぱたいて急がなければなりませんでした。

荷が重くなつては不可なので、弟も車の上には乗せませんでした。

「サツサと歩け！ そしたら暖かくなる」

私は弟をも怒鳴りつけました。弟は転びそうになるぬかるみを、それでも、元氣よく歩きました。しかし、柄が小さいだけに、深みに足をとられて、倒れそうになるたびに、提灯を消してしまします。

「コン畜生！ しつかりしろー！」

性急の私は、悪いと思ひながら、いきなり足をあげて飛ばします。

いよいよ、私達荷馬車を挽く仲間に、最も怖れられている難所の金釘にかかつてきたのでした。急坂の一町ばかり手前で、私達は馬を止めて息を入れました。

「兄ちゃん、大丈夫かな」

弟は全身泥まみれて提灯をかかえながら私を見上げて

云います。

「なあに……」

私は元氣をつけて云いました。そして車の抽出から鎌をとり出して提灯の灯りで、草を少し刈つて来て、馬に噛ませました。馬は大分疲れているらしく、一寸くわえたまま、フウフウ息を吐いています。

「兄ちゃん、ウンとくたびれてるぜ」

馬が草を直ぐ噛もうとしないのを見て、弟は云いました。私は帽子を脱いで傍の溜りから、溷つた水を汲んで来て、馬に吞ませました。

そして、私達も車の上に腰かけて、握り飯を食いました。グシヨグシヨに濡れた沢庵は味も何も無かつたんですが、それでもよかつたのでした。

ちよつと、小降りになつたのを見て、私達は手綱をとりました。弟は竹切れを拾つて来て、馬の向う側に廻りました。

「いいか、たのむぜ」

馬は平首を叩かれて、頷くように胴ぶるえ一つすると前足をガツキと踏みたてました。

「ホラ、ホラッ」

私も、手綱を車の梶棒かじぼうに結ゆわいつけて、肩にかけて、引張りながら、この急坂の中溜りまで引きあげようと、思いました。弟も車の横を駆け出しながら、馬の尻を叩たたきます。

ぬかるみは、とてもひどかったのです。車の半ばは埋まってしまふ程でした。狭い坂道の左手へ少し横切ろうものなら、三間けんあまりの崖で、その下は、泥みたいな田圃たんぼになっていのです。

「サア、もう一息だ」

こう云ったけれども、その時は、馬も弟も私も、ほとんど疲れ切っていました。

「ソラッ！」

馬も一生懸命です、私も必死でした、しかし、ぬかるみは、車に吸いついたように、ちつとも動こうとしません。

荷物の魚は、夜が明けるまでには、植木の魚問屋おに下ろさないと役に立たなくなるのです。

車がわずかに動きました。

「ホラ、ホラ」

弟は泣きながら、竹切れで馬の尻を叩きます！

坂の七分目まで来て、馬は動かなくなりました、馬は前足を折って、泥の中に坐すわってしまいました。荷を軽くしようにも、上積うづみの重いのは、子供の力で下せおろようありませんでした。

「畜生！ 意気地いきてがねえ。」

私も滅茶苦茶めちゃくちやになって、馬のたて髪を引張りましたが、馬は死んだように、わずかに首を動かしたきり、折った足を再び踏み立てる元気はありません。

「兄ちゃん、どうしよう……」

弟はおろおろしながら、提灯をかかえてぬかるみへ坐りました。提灯の灯りの下に、平首を擦り付けている馬の大きな瞳には、涙がいっぱい溢あふれていました。それを見ると、私も堪たまらなくなつて、弟と二人で馬の平首にとりついたらまオイオイ泣き出してしまいました。

私達はそれから一時間ばかりして、同じ植木通いの仲間にたすけられて、やつと坂を越すことが出来ました。が、ほんとうに馬くらい正直な動物はありません。私は、今でも荷車を引張っている馬などを見ると心から親しみを感ずます。

馬は泣くばかりでなく、よく笑うことがあります。しかし東京あたりでは、笑うような、のんびりした馬は少ないようです。

二〇一六年三月一四日 初稿 公開
二〇一六年三月一五日 第二稿 公開

【解題】

〈初出〉『能率委員会〈日本プロレタリア傑作選集〉』（日本評論社、一九三〇年一月）

※ 攔筆は（一四、六、七稿）。

〈再録本〉『現代日本文学全集⁶²プロレタリア文学集』（改造社、一九三二年二月）

※ 攔筆は（大正一四、六、七稿）。以降の書誌について攔筆は省略する。

貴司山治編『世界最小短篇傑作集 小さな花束』（『文学案内』二巻一号第一附録、一九三六年一月）

『戦列への道』（青木文庫 92 日本プロレタリア文学体系）（青木書店、一九五三年二月）

『日本プロレタリア文学大系2 運動成立の時代』（三一書房、一九五四年九月）

『学習の友』十三号（一九五四年十一月号）

※ 「作者の解説」が付され、「労働はいかに人間を鍛えるか」という表題で次のように記されている。「この作は、末尾の日附にあるように大正十四年で、「太陽のない街」より五年ほど以前のものである。

もちろん、まだ「太陽のない街」の争議もなく、共同印刷工場で働いていたときで、文壇など知らなかった頃である。記憶では、当時、私らの労働組合「H・P 倶楽部」（この年の秋に関東印刷労働組合と合同、出版労働組合と改称し、日本労働組合評議会に参加）の機関紙「HP 倶楽部」にのせてもらおうと思っただけだったが、のせられなかったようだ。六、七年たって、文壇にでて、短篇集をつくったとき、原稿紙のままに加えた記憶がある。／ × × × / いまから三十年前の工場で労働している人間が文学を勉強するということは今日と事情がまるでちがっていた。文学サークルなどはないし、まったくの孤独だった。歴史的にはこの頃すでにプロレタリア文学運動がはじまっており、私など「種蒔く人」や「文芸戦線」など、手にいれることがあったが、まだプロレタリア文学運動は工場などに手をのばすほど成長しておらず、労働者出身の作家といった人々が二、三あっても、その人々

は毎日工場で残業などして働いている労働者とは、ずいぶんちがった生活をしている人々だった。失業して、もう何年も小説かくために一切をうちこんでいる人、朝夕に新聞配達なぞして文学を勉強している人、つまり労働者作家といっても現役ではない人々で、生活は文学運動と文壇の周囲にいる人々であった。／したがって、当時はまだプロレタリア文学運動と、工場内の労働者との間には距離があつたから、文学勉強の仲間というのがなかった。そんなわけで、大きくは当時のプロレタリア文学運動にはげまされ、みちびかれながらも、直接には孤独で、労働組合の機関紙に、時折のせてもらうことがめやすだった。／そのことはこの作のスタイルにもよくできていると思う。漢字が多いのは当時の一般的風習で（私がプロレタリア文学運動にもつと参加していれば意識的に少くしたかもしれない）それに植字工という私の職業もてつだっているが、表現はいたってあけっぱなし、職場仲間を読者相手としていることがわかる。／さらにこの主題が、大正十四年ごろのプロレタリア小説のそれと比べてみると明らかなように、はげしい労資の闘争といったものどちがっていることも特徴的である。表現としても幼なく、「貴公子を乗せて」とか「涯しのない野原」とか、または会話などに通俗な言葉づかいがあるのをみても、たとえば小林多喜二の初期の作品とくらべてみると、文壇とか文学勉強とかから遠く離れておかれている私の位置がわかる。／しかし、それにもかかわらずこの作品は、この労働経験と、経験から学びとつた馬という動物の性質、馬と人間とのあいだをつなぐ真実、それらがほとばしりでている。幻い表現マジックのようにみえて、単純率直に読者の心にとびこんでゆく強さをもっている。なんのたくらみもないのに「金釘の難所」をこえるため、人と馬とがどんな動作や予備行動するかが、読者をなつとくさせるに充分なほど、かんたんな筆で、しかも急所をとらえている。／この作の値打は、人間と労働との関係、労働が人間をいかに鍛え、賢くするか、労働する人間の人間性はいかにしてつくらたるか、人間性そのものと労働との関係——を、小さいながら

描いたところにある。小作ながらこのような主題が一九二〇年にかかれていたといことは注目すべきことである。／この作は今日、外国にも翻訳されているが、今日のはたらく読者諸君からみて、文学とは遠いようでじつはごく近くにあるのだということを知る、一つの見本ということも出来よう。」

『日本プロレタリア小説集』（新日本出版社、一九六三年十二月）

『日本プロレタリア文学選1』（新日本出版社、一九六九年一月）

『土とふるさとの文学全集6雲と青空と』（家の光協会、一九七六年三月）

『日本プロレタリア文学集 24・徳永直集1』（新日本出版社、一九八七年一月）

『馬の文化叢書第九巻「文学——馬と近代文学」』（財団法人馬事文化財団、一九九四年十二月）

※ 本稿では『学習の友』版を底本とし、各版を参照して校訂した。なお、底本はルビ無しで、難読と思われる漢字に校訂者がルビを付した。

【校訂メモ】

- ・一頁下段の「潤してしまふ」と「泣かされてしまふ」は、作者の生前に発行されたテキストのうち、『現代日本文学全集』版のみ「しまふ」で、後の版は「しもふ」であるが、現代の読者にわかりやすいよう「しまふ」を採用した。
- ・三頁上段の「荷が重くなつては不可ないので、弟も車の上には乗せませんでした。」は、底本で削除されているが、他の版に則り復元した。

入力・校訂者 Ⅱ 和田崇